Abstract

陳冷血による翻訳小説の底本に関する考察

国　蕊
✉ gggrrrsw@163.com

Chen Leng Xue, a famous novelist, journalist and translator of the early twentieth century, profoundly influenced the translation and creation of Chinese modernization, the May Fourth writers and their works. Although consideration of translation is an important part of the increasing research on his translated novels, the global appreciation of his contribution has not fully been grasped.

This paper uses the comparative method based on the title of the novel, angle of writing, outline, plot, expression, etc. to consider and verify concretely the essence and origin of the novels which Chen Leng Xue translated. In this paper, *Mo ai Romance* and *Beggar girl* were presented as examples to describe the considerations of Essence and Origin of Leng Xue's translations, which has not yet been shown, and also examines the feature of the Japanese route in his translation.

Keywords Chen LengXue(陳冷血), Essence and Origin(底本), Translation Novel(翻訳小説), Modern and Contemporary literature(近現代文学)

はじめに

陳冷血(一八七八——一九六五)、本名は陳景韓、江蘇松江(現在の上海市)の出身。「冷血」はペンネームで、広く知られる通称となった。1899年末から1902年にかけて日本に留学していたが、帰国後、新聞界に入り、『時報』、『新新小説』、『申報』等の主筆を歴任し、ジャーナリストとして活躍した。一方、小説の創作と日本語からの西洋小説の重訳にも取り組み、77部の翻訳小説(共訳を含む)を残した清末民初の人気小説家・翻訳家として、中国近代及び五四以降の翻訳と創作に見逃せない影響を与えていると思われる。

近年来、冷血の翻訳小説に関する研究は増えてきた。その中で、翻訳小説の底本考察は重要な一環である。冷血は日本語に熟達しているため、翻訳した小説は主に西洋小説の日本語訳からの重訳であると思われる。樽本照雄氏の『清末民初小説目録』、李志梅氏の『報人作家陳景韓及其小説研究』等の先行研究は、その一部の底本を明らかにしたが、冷血の翻訳小説を主題にしていないため、冷血の翻訳の全体像を把握することは難しく、また日本語底本からの重訳にはどんな特徴があるのかという問題もまだ十分に論じられていない。

そこで本稿では、比較の方法を通して、冷血が翻訳した小説の底本を具体的に考察、検証した上で、冷血の翻訳における日本ルートの特徴を究明したいと思う。

一 訳本の提示した情報に基づいての底本確認

先行研究で明らかにされた冷血の翻訳小説の底本は下記の12部がある[1]。

① 游皮	日译底本：「探偵ユーベル」、思軒居士訳、民友社、1889年
	原　　作：*Hubert, The SPY・Choses vues 1830-1846*, Victor Hugo
1. 圣人坎盗贼坎	日译底本：「聖人か盗賊か」、リツトン卿原作、原余三郎(原抱一庵)訳、今古堂書店、1903年
	原　　作：*The Minnie and Winnie*, Lord Lytton
2. 巴黎之秘密	日译底本：「巴黎の秘密」、ユージン・シュー 著、原抱一庵訳、富山房、1905年
	原　　作：*Les Mysteres de Paris*, Éugene Sue
3. 虚无党奇话	日译底本：「虚無党奇談」、松居松葉(真玄)訳、警醒社、1904年
4. 虚无党	日译底本：「魯国奇聞虚無党」、『文芸倶楽部』1903年12月第九巻16号
5. 三缕发	日文原著：「無惨」、黒岩涙香著、鈴木金輔、1889年
6. 白云塔	日文原著：「銀山王」、押川春浪著、博文館、1901年

1 下記の先行研究を参照：樽本照雄「ユゴーの漢訳名囂俄について(下)」(『清末小説から』第98号，清末小説研究会，2010.7)、樽本照雄『新編増補清末民初小説目録』(斉魯書社，2002)、李志梅『報人作家陳景韓及其小説研究』(華東師範大学博士学位論文，2005)、李艶麗「晩清俄国小説訳介路径及底本考：兼析“虚無党小説”」(『外国文学評論』1号，中国社会科学院外国文学研究所，2011)、梁艶「清末民初におけるレ・ミゼラブルの移入と日本—陳景韓訳「逸犯」を例として」(『Comparatio』第15号，2011.12)、張艶「陳冷血両篇翻訳小説的日語底本」(『清末小説』第35終刊号，清末小説研究会，2012.12).

7. 新蝶梦	日译底本：「白髪鬼」、ハビオ・ロ－マナイ著、涙香小史訳、扶桑堂、1893 原　　作：*Vendetta*. Marie. Corelli
8. 莫愛双麗傳	日译底本：「古王宮」、黒岩涙香訳、扶桑堂、1889年
9. 逸犯	日译底本：「噫無情」、黒岩涙香訳、扶桑堂、1906年
	原　　作：*Les misérable*. Victor Hugo
10. 俄帝彼得	日译底本：「ドウブロフスキー.ペートル大帝の黒奴」
11. 心	日译底本：「心」、上田敏訳、春陽堂、1909年6月15日
12. 生计	日译底本：「余計者」『チエホフ傑作集：露国文豪』、瀬沼夏葉訳、獅子吼書房、1908年
	原　　作：*Not Wanted*. Anton Checkhov

上述の⑥、⑦の底本は日本の小説である。そして、筆者が確認したところ、⑨「莫愛双麗傳」の底本は指摘された「古王宮」ではないようである。それについては、後述する。筆者は小説のタイトル、訳本に書かれた原作、底本の情報や小説の筋などを手掛かりにして、底本調査を展開した。具体的な作業は二種類に分けられる。

第一に、小説のタイトル、あるいは冷血の訳本で明示されている底本・原作情報に基いて確認した。代表的な例は「明日之戦争」と「美人狩」である。冷血訳の「明日之戦争」が発表される前に、日本ではすでに二つの版本の「明日の戦争」が出版されていた。一つは厩堂散人訳、明治27年2月兵事出版社より刊行されたもので、もう一つは桃源小史訳の同名小説である。冷血が「明日之戦争」緒言に、「法国鄧利氏著之、日本厩堂散人譯之」[2]と明示しているため、その底本は厩堂散人訳の「明日の戦争」であると認めることができる。そして、テキストを確認したところ、冷血の訳本は日訳本の第四章までの部分訳で、本文中に読者に対して国を救おうとする冷血自身の呼びかけがたくさん書き入れられている。

また、冷血訳の探偵小説「美人狩」には、「芙蓉生譯」と署名されている。筆者が日本明治時代の芙蓉生訳の同名小説「美人狩」を調べたところ、冷血の訳本が日訳本の全訳で、人物の名前さえもほとんど同じであることが分かった。比較してみよう。

	少年侦探	富豪女儿	富豪侄女	侄女夫	富豪
中	松井敏雄	秀子	梅子	专六	白井为田
日	松井敏雄	秀子	梅代	专六	白井勘弥

よって、「美人狩」の底本が芙蓉生訳の同名小説であることは疑う余地がなかろう。

また、一部の翻訳には、底本、原作についての情報が示されていないが、タイトル、標注や角書きなどをキーワードにして調べると、それと合致している日本語訳本が見つけられた。例えば、「伯爵與美人」、「義勇軍」、「王妃怨」、「祖国」等の作品について、日本の明治時代に同名の翻訳小説を発見した。角書きも大体共通する。例えば、「王

2 「『明日之戦争』緒言」(『江蘇』第4期, 冷血訳, 1930.6). p.1.

妃怨」の「史談」は日訳本「悲恋の王妃」の角書きと一致している。「伯爵與美人」の「多情之偵探」、「祖国」の「世界三大悲劇之一」もそれぞれ日訳本「伯爵と美人」の「探偵小説」、「祖国」の「三大悲劇」と一部共通している。そして、人名、地名などには日訳本の痕跡もみえる。「王妃怨」に登場する女主人公の名前は中、日版本では皆「小菊」である。「伯爵與美人」と「伯爵と美人」の男女主役は同じ「小林」、「瓦多嬢」となる。また、「義勇軍」に登場する主な人物の名前は下記の通りである。

日	竹馬	鈴多	羅美似
中	竹骨	鈴多娘	羅美似
法	Nigolas pichon	Berthine	Romy

比較すればわかるように、人名では冷血の訳本は日訳本とほとんど一致しているが、フランスの原作とはずいぶん離れている。これに基づいて、一部の先学は冷血の翻訳が原作に従わない、不忠実なものであると指摘した[3]。このように、日本語訳底本の確認は冷血の翻訳を再評価するうえで、新たな客観的な意義を提供している。

第二に、冷血の翻訳した小説には底本が明示されていないばかりでなく、小説のタイトル、人名なども改変された作品が数多く存在している。筆者は小説のあらすじ、プロット、表現などに依拠して調査を試みた。その結果、「錯恨」、「莫愛双麗傳」、「秋雲嬢」、「拿破侖帝後之臨終」、「乞食女児」等の底本を明らかにした。紙幅の関係で、本稿では「莫愛双麗傳」、「乞食女児」の底本考察を例として述べるにとどめる。また、原文を引用せず、内容を要約して説明するにとどめる場合もある。

二　原作情報が明示されなかった翻訳の底本確定――『莫愛双麗傳』『乞食女児』を例として

1.「莫愛双麗傳」

冷血訳「莫愛双麗傳」は1907年7月に出版された単行本で、冷血の「言情小説」シリーズに属している。樽本照雄氏は「莫愛双麗傳」の底本が黒岩涙香訳「古王宮」である可能性を示唆した[4]。しかし、読めばわかるように、「莫愛双麗傳」と「古王宮」の話はまったく異なるものである。それを確かめるために、両作品の梗概をまとめておきたい。

「莫愛双麗傳」梗概

ある日の朝、土地の富豪奥斯家に雇われている殼愛西という若い書記が、密利の事務

3 杜慧敏『晩清主要小説期刊訳作研究(1901-1911)』(上海書店出版社，2007.12)，p.142.
4 樽本照雄『新編増補清末民初小説目録』(斉魯書社，2002)，p.487.

所に駆け込んで、主人が殺されたと報告した。旅行中の密利のかわりに、頼徳が代理となって奥斯家へ出張した。「すると、既に頼徳の…詰めかけており、」同家の奉公人および娘分になっている奥斯の二人の姪、莫麗、愛麗への審問が行われた。二人の令嬢とも二十歳前後の美しい少女である。奥斯は二人を可愛がっていたようだが、莫麗が亡妻に似ているから、我家の財産は彼女にのみ与えるという不十分な遺言書が書かれてあることなどが判明した。愛麗が奥斯の部屋の鍵を持っていたうえに、奥斯の死骸の傍らにあった紙切れ(英国紳士が莫麗を非難した奥斯宛の手紙)を隠していたことなどが明らかになると、伯父奥斯殺しの嫌疑は愛麗のみにふりかかる。しかし、愛麗はしとやかな淑女で、莫麗のためを思って誤解を受けているようで、伯父を殺すような娘ではなさそうであった。傍見探偵は頼徳に調査を託して、莫麗が密かに英国紳士と自由結婚を履行していた事実を探知した。次に犯罪の夜から行方不明になっていた下女、花子が探索され、何者かに毒を飲まされて死亡していたことが探知された。傍見探偵が調査を進めていくと、莫麗の秘密の結婚を耳にした伯父奥斯は元来、英国人を非常に嫌っていたので、紳士の妻になれば、財産を全て愛麗に渡すと莫麗に警告していたことが判明した。そのため、傍見探偵は莫麗を疑っていた。傍見探偵は加害者が誰であるかを発表するからと、自宅の一室に頼徳を招き、同時刻に奥斯家の関係者一同を呼び集めて暫時廊下で室内の自分の声を立聴きさせるというやり方をとった。真犯人――殻愛西が誘き出されてきた。身分違いの片恋で、莫麗を愛していた殻愛西は、莫麗の悲哀を救おうとして、殺人罪を犯すまでに至り、さらに犯行直後、花子に会ったので、彼女を毒殺したのだった。やがてめでたく財産の執着を断った莫麗は英国紳士と、愛麗は頼徳と結婚するのであった。

「古王宮」梗概

英国のテ―ムス河の畔にあまり繁栄もせぬ私立女子校があった。そこの校主奥谷夫人に幼いころから厄介となって、助教授をしている稲川菱江は両親を失った十八歳の美しい少女であった。菱江は寂しい、貧しい暮らしをしていたが、半年前、妻子もなく遺言状も残さずに死亡した古王宮の持主で、大資産家の柳園伯爵と亡父が血続きであった。彼女は最も伯爵と血縁の近い者と認められ、それから三週間後の六月初めにはその後継者、柳園伯爵令嬢、菱江姫として古王宮に華々しく乗り込んだ。そこで、三百年来現れたことのないという評判の美人と絶賛された菱江は、軍人の戈田武男と武男の友人であった保路の心を奪い、二人は菱江をめぐってぎくしゃくする。やがて、菱江は全財産を保路に譲るという内容の、故伯爵の真実の遺言状を発見する。逃げ道として、菱江は保路のプロポーズに応じて、愛する武男の求婚を断った。最後に、秘密がばれたので、菱江は改心して、保路に実情を打ち明け、今までの事は忘れて私を愛してくれと引き止める保路を断り、ロンドン行きの列車に乗った。車内で、菱江は心労から熱病となって意識を失い倒れてしまったが、保路を愛している上官の娘綾子に救われた。世論は菱江の心の高貴さに感じ、彼女の言動を絶賛した。武男は菱江が保路と別れたことを

知り、菱江に今一度求婚し、二人は結婚した。また、失恋した保路は数年後に綾子と結婚した。武男は石炭王となり、両家は親類のような間柄となった。また、かの奥谷夫人の女学校は名高い菱江を教育した学校としてその後も繁昌している。

以上が両作品の要約である。内容が全然異なることは否定できない。「莫愛双麗傳」の本文が始まる最初の頁に、「涙香小史譯」と提示されている。これに基いて、黒岩涙香の翻訳小説を調べてみると、1889年8月9日から10月26日にかけての『絵入自由新聞』に訳載され、同年12月23日に単行本として出版された探偵小説「真ッ暗」は、二人の美しい少女が伯父の殺されたことで嫌疑がかかり、真の殺人者を究明するために探偵傍見と頼田がいろいろと工夫して、最後に解決するというストーリーで、「莫愛双麗傳」と同じである。そのため、「莫愛双麗傳」の底本は「古王宮」ではないと一応判断できる。

対照して読んでみると、「莫愛双麗傳」はほぼ「真ッ暗」の通りに訳されたものであることが確認できる。大きな異同はないといえるが、ただし、下に示すように、人名がすべて換えられている。

中	莫丽	愛丽	奥斯	密利	壳西愛	頼德	傍見
日	鞠(まり)子	襟(えり)子	大洲(おおす)仙蔵	実(み)入(いり)吉雄	越江(こしえ)真人	頼田	傍見

字面からみると、「傍見」、「頼田」を除くと、他の人名については「莫愛双麗傳」は「真ッ暗」と無関係のようである。しかし、その音声を見てみると、「莫愛双麗傳」の人名の発音は、「真ッ暗」と似ている。例えば、「莫麗」の中国語の発音はローマ字で表示すれば、「mori」となり、「鞠子」の「mari」と似ている。「愛麗」の発音は「airi」、「襟子」の「eri」と相似している。また、「奥斯」の「aosu」は「大洲」の「osu」、「密利」の「miri」は「実入」の「miiri」と、「殻西愛」の「kosiai」は「越江」の「kosie」とそれぞれ対応している。「鞠子」、「実入吉雄」などはすべて日本式の人名で、訳者黒岩涙香の加筆によるものと推測できる。日訳本の人名をそのまま直訳せず、その発音と近似している中国語の漢字を当てて訳したのは、小説の日本風を削除し、原作の西洋小説の異国情緒を読者に呈すること、また、「鞠子」、「襟子」などは中国語としては普通名詞なので、どうしても富豪家のお嬢様の名前にはなりえないということに原因を求めることができるだろう。このように、冷血訳「莫愛双麗傳」は「真ッ暗」を底本にしたことが明らかである。

2.「乞食女児」

「乞食女児」は、1907年10月、『月月小説』に掲載された一回で完結する短編小説である。『月月小説』の編集者は清末の重要な小説家呉趼人(1866-1910)であったが、1907年9月「社中の紛争」が発生し、編集者が変わり、さらに冷血などの当時の有名な新聞小説家を奥の手として起用し、「冷血、天笑、天僇の大物を招いて著述の援助をしていただい

た」と広告した[5]。「乞食女児」は、すなわち冷血が『月月小説』に掲載した最初の小説となる。その梗概は次のようである。

ロンドン西部にすむ英国屈指の財産家、男爵杜密は若くして夫人に子なくして先立たれてから、再び妻を迎えることなく弟の子、永吉を愛して養子のように育てていた。ところが、永吉は許嫁者の召使いと馴れ合って捨てたり、銀行員を博打に誘って使い込ませたり、そのために流刑に処せられた銀行員から老母を託されたのに面倒をみず餓死させたりして、残忍酷薄の行いが目にあまったので、男爵は永吉を家から追い払った。田舎の別荘へ気晴らしに行く途中、男爵はある宿屋の二階に投じた。その夜、若い女の歌が窓の下で聞こえた。窓辺に寄って見ると、女乞食が霜の降りた大地に転び伏したので、援けに出たところ珍しいぐらいの美人なので、宿にとめてやった。次の日、男爵は女乞食明珠を家に留めようとするが、明珠はその好意を拒否して離れようとする。男爵は彼女に音楽の才能があることを知ったので、音楽教授所へ入れて面倒を見てやることを約し、汀夫人の教授所へ住ませてやった。その後、男爵は世界旅行に出た。一年後、男爵は帰り、明珠にプロポーズして、二人は結婚した。

以上が「乞食女児」の筋立てで、さして波瀾に富むストーリーとはいえないであろう。小説では、原作・底本に関する情報などが一切提示されていないので、冷血の創作と誤解される可能性もあるが、実は冷血のオリジナルではない。筆者は黒岩涙香の作品中に、「乞食女児」と同じ話を含む翻訳小説「捨小船」を発見した。「捨小船」は『万朝報』(1984年10月25日~翌年7月4日)に訳載され、全155回という長編で、涙香の翻訳家庭小説の王座を占める作と評される[6]。やや長くなるが、「捨小船」の粗筋を確認しておきたい。

①今より三十余年前、クリフという英国の一港場の水夫倶楽部という酒屋に、第二立田号船長立田が入り、主人に第一立田号の船長横山からの手紙をもらった。そこで、十五、六歳の美しい芸者園枝と彼女の乱暴な父親古松と知り合った。ある日三人で歌牌を始めたが、最後は喧嘩となって、立田は殺された。翌日、横山は立田に会いに水夫倶楽部へやってきて、立田が殺されたことを知って、船乗りをやめ、その生涯を復讐のために費やすことに決心を固めた。②それから一年余り過ぎた。ロンドン西部にすむ英国屈指の財産家で、夫人を亡くした男爵常盤幹雄は姪、永谷礼吉を養子と見做して育てていた。しかし、彼は婚約者の侍女と密通したり、銀行員を賭博に利用したり、流刑に処せられた銀行員の老母を餓死させたりしたので、男爵に家から追い払われた。男爵は気分転換のために田舎にある別荘へ帰る。その夜、途中で宿屋の二階に投じた男爵は、窓際で若い女の歌声を聞く。窓から見ると、街角に美しい女乞食が座っている。男爵は女乞食を可哀そうに思い、宿にとめてやった。次の日、男爵は女乞食園枝を家に連れて帰ろうとするが、園枝はその好意を拒否して離れようとする。男爵は彼女に音楽の才能があることを知って、音楽教授所へ入れて面倒を見てやることを約し、汀夫人の教授所へ住

5 邯鄲道人「跋」(『月月小説』第1年第12号, 1908).
6 伊藤秀雄「黒岩涙香」(桃源社, 1979), p.217.

ませてやった。**永谷礼吉はその親友、外科医師皮林に相談し、伯父の機嫌を直してもらうことを頼んだ。**それから一年半後に、男爵は園枝と結婚した。③皮林の意見で永谷はまず詫び手紙を出し、男爵家に出入りを許された。園枝を不義者にするために皮林、永谷の仕組んだわなや、倉浜小浪嬢という男爵を夫にと狙っていた陰険な婦人の毒舌に迷わされた男爵は、園枝が皮林と密通したと思うようになっていった。皮林は男爵を毒殺しようとしたが、大佐が男爵の身代わりになって毒を飲み、園枝に毒殺犯の疑いがかかった。④ロンドンの一市街に、「秘密探偵社、横山長作」と看板をかけた事務所がある。社長横山は大佐に毒を飲ませた者と、船長立田を殺害した犯人が園枝と知った。園枝は拘引され、未決監へ移された。⑤最後に、横山は警官と真の犯人を探察して、園枝の冤罪を雪いた。男爵と昔の愛を復した園枝夫人はその後数人の子供をもうけ、その一人を家族の相続人とした。

下線部を別として、「乞食女児」の内容は「捨小船」の②部分と対応している。「乞食女児」が発表される前に、冷血の同僚包天笑は『時報』(1908年6月1日~1910年7月14日)に、読者を強くひきつけ、後に映画化された名高い翻訳小説「梅花落」を訳載した。「乞食女児」は「梅花落」の部分の内容とほぼ同じなので、「梅花落」から抜粋したものであると指摘されている[7]。筆者の調査によれば、「梅花落」の底本も「捨小船」であり、人名が変えられていること及び微妙なニュアンスを別とすれば、大きな相違はないことが確認できる[8]。冷血訳「乞食女児」が「梅花落」から抜粋したものであるか、あるいは「捨小船」の部分訳であるか、これを究明するために、筆者は三つの作品を対照しながら検討してみた。すると、男爵宛の姪の悪事を暴く手紙という底本関係を説明できるプロットをみつけた。「捨小船」では、男爵が二通の手紙を受けとる。一つは姪永吉にふられた侍女が死ぬまぎわに永吉に書き残した手紙である。もう一つは流刑に処せられた銀行職員の老母が死ぬ前に書いた手紙である。「乞食女児」では、この二通の手紙とも侍女と銀行職員の老母が死ぬ前に書いたもので、「捨小船」と一致している。しかしながら、「梅花落」の場合、二つの手紙はともにふられた侍女が書いたものへと改変された。『乞食女児』と違っており、底本「捨小船」に対する改訳と認められる。さらに、三つの作品の登場人物を比較してみよう。

題名	男爵	侄儿	卖唱女	音乐教师
捨小舟	常盤幹雄	永谷礼吉	園枝	汀夫人
乞食女儿	杜密	永吉	明珠	必洁夫人
梅花落	常勃尔	那克托常勃尔	園珠	梅汀夫人

「梅花落」に登場する男爵「常勃尔」の「常」、女乞食「園枝」の「園」、音楽教師「梅汀夫人」の「汀」は何れも底本「捨小船」と一字を共有する。「乞食女児」では人名の改変が大きい

7 阚文文「晚清報刊翻訳小説研究」(華東師範大学博士学位論文, 2008), p.102.
8 具体的な検証は本論の論題と直接に関連しないため、後日の課題に譲る。

が、姪「永吉」は明らかに「捨小船」の「永谷礼吉」から来るものである。こうしたことから、「乞食女児」は「梅花落」から抜き出したものではなく、「捨小船」の翻訳であるということを確かめることができたと考える。

以上、「莫愛双麗傳」と「乞食女児」を例にして、原作情報が提示されていない冷血の翻訳小説の底本確定の経緯を述べてみた。同じような方法で、筆者はまた下記の底本を明らかにした。ただし、紙幅の関係で、これらの研究成果は、後日、別途公表するものとする。

1. **明日之戦争**：法陸軍大尉鄧利著(『江蘇』第4~7期，1903.6.1-9.1).
   日本語訳本：『明日の戦争』，厩堂散人訳，兵事出版社，1894.2.
   原　　作：La Guerre de demain, Émile Augustin Cyprien Driant, 1889.
2. **伯爵與美人**：「多情之偵探」(『時報』1904.4.29-12.26).
   日本語訳本：「多情探偵」(『伯爵と美人』，有明山樵訳，東京弘文舘，1897.6).
3. **義勇軍**：「法毛白石氏著」(『新新小説』第1年第2号，1904.11.26.).
   日本語訳本：「義勇軍」(『太陽』，橋本青雨訳，1904.11).
   原　　作：Les Prisonniers, 1884.12.30, GuydeMaupassant.
4. **火里罪人**：「偵探奇談」(『時報』1904.11.25-1905.3.9., 1905.5.21-10.13).
   日本語訳本：「死美人」(『都新聞』，黒岩涙香訳，1891.11.8-1892.4).
   原　　作：The old age of M.lecoq, 1886, Émile Gaboriau.
5. **美人狩**：『偵探譚』第4冊(開明書店，1904).
   日本語訳本：「美人狩」(『探偵小説第8編』，芙蓉生訳，春陽堂，1893.4.17).
6. **白格**：杜衣児著『虚無党』(開明書店，1904).
   日本語訳本：「無政府党と一夜」(『泰西奇文』，原抱一庵訳，知新舘，1903.9).
   原　　作：A Night among the Nihirists,1881, Arthur Conan Doyle.
7. **錯恨**：「軍事談」(『新新小説』第1年第7~8号，1905.3.1/4.1).
   日本語訳本：「心と心」(『万朝報』，黒岩涙香訳，1898.1.2-12.31).
8. **秋雲嬢**：「言情小説」(『時報』，1906.1.5-2.9)
   日本語訳本：「絵姿」(『万朝報』，黒岩涙香訳，1899.1.1-2.25).
9. **莫愛双麗傳**：涙香女史著『偵探小説』(上海時報舘，1906.7.15).
   日本語訳本：「真暗」(『絵入自由新聞』，黒岩涙香訳,1889.8.9-10.26).
   原　　作：The Leavenworth Case,1878, Anna Katharine Green.
10. **偵探之偵探・土里罪人**：『時報』(1906.11.29-1907.3.25).
    日本語訳本：「活地獄(一名「大金の争ひ」)」(『都新聞』，黒岩涙香訳，1900.7.22-10).
11. **史談・王妃怨**：『時報』1907.7.28-10.1.
    日本語訳本：「史談・王妃の怨」(『万朝報』，黒岩涙香訳，1903.11-1904.3).
12. **爆裂弾**：『月月小説』(1908.4.1/ 6.1).
    日本語訳本：第四章「露国皇帝の生命」(『虚無党奇談』，松居松葉訳).

原　　作：Strange Tales of a Nihilist,1892,Willianle Queux.

13. **俄国皇帝**：『月月小説』第19~21期，1908.7/1908.9.

日本語訳本：『虚無党奇談』，松居松葉訳，第4章「露国皇帝の生命」；

原　　作：Strange Tales of a Nihilist，1892，Willianle Queux.

14. **俄国之偵探術**：『小説時報』第1期，1909.9.1.

日本語訳本：第四章「露国皇帝の生命」(『虚無党奇談』，松居松葉訳).

原　　作：Strange Tales of a Nihilist，1892，Willianle Queux.

15. **決闘**：一名：金里罪人「偵探小説」(『時報』，1908.9.29-11.8).

日本語訳本：「悪党紳士」(『絵入自由新聞』，黒岩涙香訳，1988.12.4-1989.1.24).

原　　作： Bouche cousue（英訳：Sealed Lips)，1883，Fortuné du Boisgobey.

16. **決闘**：『小説時報』第8，11期，1910.12.20，1911.6.5.

日本語訳本：「決闘の果」(『東西新聞』，黒岩涙香訳，1889.9.25-11.26).

原　　作：Les Suites d'un duel（英訳：The Results of a Duel / The Consequences of a Duel：A Parisian Romance)，1882，Fortuné du Boisgobey.

17. **破産**：『月月小説』(第11~12期，1907.11.15，12.15).

日本語訳本：「厳窟王」(『万朝報』，黒岩涙香訳,1901.3.18-1902.6.14.).

原　　作：Le Comte de Monte-Cristo(英訳：The Count of Monte Cristo)，1844-46，Dumas Alexandre.

18. **窟中人**：「奇情小説、復讐小説」(『時報』，1908.1.24-8.14/1912.7.15-1913.3.1).

日本語訳本：「厳窟王」(『万朝報』，黒岩涙香訳,1901.3.18-1902.6.14).

原　　作：同上.

19. **拿破倫帝後之臨終**：『時報』1908.10.26-10.28.

日本語訳本：『那翁外傳 閨秀美談』秋庭濱太郎訳(文事堂，1886).

20. **乞食女児**：「短編小説」(『月月小説』第1年第10号，1907.10.15).

日本語訳本：「捨小船」(『万朝報』，黒岩涙香訳，1894.10.25-1895.7.4).

原　　作：Diavola(一名：No Bodies Daughter)，1886，Mary Elizabeth Braddon.

21. **怪人**：『時報』1910.8.23-1911.2.14.

日本語訳本：「海底の重罪」(『都新聞』，黒岩涙香訳，1889.1.3-3.10).

原　　作：Une Affaire mystérieuse（英訳：The Nameless Man)，1878，Fortuné du Boisgobey.

22. **祖国**：法柴爾時原著「世界三大悲劇之一」(『小説時報』第5~6期，1910.5.1-7.1).

日本語訳本：サルヅ―著「三大悲劇」(『祖国』，長田秋濤訳，隆文舘，1906).

原　　作：Patrie！(英訳：Fatherland),1869,Victorien Sardou.

23. **非洲石壁**：『時報』1911.2.15-1912.4.15.

日本語訳本：「人外鏡」(『万朝報』，黒岩涙香訳，1896.3.7-1897.2.26).

原　　作：Black Venus，1896，Adolphe Belot.

最も注目すべきポイントはもう一つある。それは先行研究及び筆者の調査結果では、冷血の選定した底本には黒岩涙香の作品が最も多く、15部も占めているということである。

黒岩涙香(1862-1920)、本名は黒岩周六。明治時代の著名な作家、翻訳家、探偵小説家、ジャーナリストである。黒岩涙香のほか、香骨居士、涙香小史などの筆名を用いた。『改進新聞』、『絵入自由新聞』、『都新聞』などの記者生活を経て、1892年『万朝報』を創刊した。その間に欧米の探偵小説の翻訳を試み、『法廷の美人』(1888)、『人耶鬼耶』(1887~88)で世評を得、広く知られるに至り、明治二十一年から三十年にかけての大衆読書界に涙香を中心とする探偵小説の黄金時代を作り出した。また、『万朝報』紙上では、論説に社会の不正悪徳を糾弾するかたわら、「鉄仮面」(1892~93)、「幽霊塔」(1899~1900)、「巌窟王」(1901~02)、「噫無情」(1902~03)などの世界名作を訳出し、達意の文章と流麗な自由訳とでロマンスの魅力を世に伝えた功績は大きい。黒岩涙香の小説は大衆の教訓に資するというのが主張であり、翻訳には万巻の書を読破して粒よりのものを選び、そこに様々な創意を凝らしたので、読者の興味に投じ「涙香小説」と言われて迎えられたのであった[9]。

底本情報が知られていないため、中国近代文学史における黒岩涙香の地位に関して、先学は「離魂病」、「寒桃記」、「鴛鴦離合記」、「天際落花」という四つのよく知られる涙香の小説を例として、彼を江見忠功と並べて「被中国訳介最多的日本偵探小説家」(中国で作品がもっとも多く訳された日本探偵小説家である)と評したが、依然として「日本探偵小説家」という認識にとどまっている。しかしながら、冷血の翻訳した黒岩涙香の作品は探偵小説にとどまらず、社会小説、言情小説など広い題材にわたっている。そして、これらの小説は『時報』に訳載されたため、大衆読者に馴染みやすく、日本通俗小説の代表として中国近代各階層に与えた影響は、日本文学史の主流である純文学作品より広いと考えられる。こうした意義について、学界はまだ注目していない。

三 結び

冷血が独自に翻訳した小説は68部にのぼる。上に示した通り、そのうち、少なくとも35部(うち23部は今回筆者が発見したもの、12部は先行研究で指摘のあるもの)が日本語からの重訳、或いは日本小説の翻訳である。ほかの作品の底本は未だ確定できないが、小説の中に見える「短気」(「加須克夫」)、「人形」、「女優」(「飛花城主」)のような中国語にはない日本の言葉は、これらの小説が日本小説、あるいは日本翻訳小説を底本にしたことを示唆しているだろう。底本調査の結果は事実を以て、冷血の翻訳小説がヨーロッパの作品の日本語からの重訳であるという学界の通説を裏付けている。

次に、冷血の翻訳には、「火里罪人」、「白格」、「莫愛双麗傳」のような底本の全訳があ

9 伊藤秀雄「黒岩涙香」(『黒岩涙香』, 桃源社, 1979).

る一方で、「秋雲嬢」、「乞食女児」のように、底本から一部の内容を抜粋し、独立の小説として訳出する部分訳もある。そして、冷血の翻訳には、冷血自身のモチーフに従い、底本の内容を改訳したり、削除、添加したりして、肝心なプロットを変更し、原書を再構成する場合もある。代表作として、「生計」、「決闘」(『時報』版本)、「錯恨」等の作品があげられる。一方、ほぼ底本通りに訳された直訳の作品があることも確認できる。「莫愛双麗傳」、「非州石壁」はその典型である。そのため、冷血は翻訳に際して勝手に原作を改変し、原作に忠実ではないという先学の指摘は再検討する必要があると思う。

さらに、日本文学が中国五四文学者に多大な影響を与えたことは、公認されている。しかし、議論の焦点は写実主義、自然主義、白樺派など日本近代の主流文学とのつながりに限定されている。これは通俗文学の軽視が原因であるというよりも、むしろ、通俗文学作品が大規模に日本を介して中国に輸入されたことが知られていないことが根本的な原因といえよう。魯迅、胡適、周作人などの五四文学家は冷血の翻訳小説の愛読者であるが[10]、冷血を通して黒岩涙香の作品に触れた可能性が非常に高い。黒岩涙香の文学、あるいはそれが代表する日本通俗文学が五四文学者に深い影響を与えたものと推測される。しかし、こうした点も底本情報が明示されていないことにより、これまでほぼ完全に無視されており、今後の研究の進展に待たねばならない。

参考文献

芙蓉生訳(1893)『美人狩』, 春陽堂.

厩堂散人訳(1894)『明日の戦争』, 兵事出版社.

黒岩涙香訳「捨小船」(『万朝報』)1894.10.25－1895.7.4.

黒岩涙香訳(1899)『真暗』, 金桜堂.

冷血訳(1906)『莫愛双麗伝』, 上海時報舘.

冷血訳(1907)「乞食女児」(『月月小説』第10号).

李志梅(2005)『報人作家陳景韓及び其の小説研究』(華東師範大学博士学位論文).

杜慧敏(2007)『晩清主要小説期刊訳作研究(1901-1911)』, 上海書店出版社.

阚文文(2008)『晩清報刊翻訳小説研究』(華東師範大学博士学位論文).

国蕊 Rui GUO

(中国)東北大学外国語学院。准教授。中日近現代文学比較研究、翻訳小説研究など。「陳冷血の翻訳小説『生計』に対する一考察」(『中国文学論集』第42期, 九州：中国文芸座談会, 2013)、「陳冷血の翻訳小説における一人称の試み」(『日本九州中国学会報』第51期, 九州：日本九州中国学会, 2013)。

10 胡適は「十七年の回顧」において、少年時代、『時報』に載せる冷血訳小説を愛読する姿勢を記録した。(胡適「十七年の回顧」(『時報』, 1921.10.10)また、周作人は自分と魯迅は冷血の小説を読んだり、冷血の文体を学んだりしたことを書き残した。(周作人『魯迅の青年時代』河北教育出版社, 2001).